

差は 70.6 ± 14.7 mg/dl, 72.2 ± 19.5 mg/dl であった。これらの測定値は Kwiterovich らの報告と極めて近似であった。

なお母親の総 CH 値の平均値は 257 ± 55 mg/dl と高値を示し、これは妊娠の影響によると思われる。また臍帯血中の総 CH 値と母親の総 CH 値とは有意な相関を認めなかった。

次に Fig. 2. に臍帯血中の HDL-CH 濃度の分布を示すが、男女児共に $30 \sim 39$ mg/dl にピークを有する指数関数分布であった。男児の平均値は 39.0 ± 123 mg/dl, 女児は 40.2 ± 11.8 mg/dl, 全例では 39.1 ± 11.7 mg/dl で男女児差を認めなかった。またこれらの値は先の Kwiterovich らの成績とほぼ同じであった。成人日本人の HDL-CH 値が西欧人に比較し、軽度高値であること

を考え併せると、この差異は遺伝的要因よりむしろ後天的因子によることを示唆しており、非常に興味ある成績である。

Fig. 3 は臍帯血中の総 CH 値と HDL-CH 値との相関を示したもので $r=0.762$, $P < 1\%$ で両者に有意な相関を、また臍帯血中の総 CH 値と総 CH-(HDL-CH) 値との間にも $P < 1\%$ で有意な相関を認めた。しかし母親の HDL-CH 値 (71 ± 19 mg/dl) と臍帯血中の HDL-CH 値とは相関を認めなかった。以上臍帯血中の CH 値は妊娠により代謝状態が変化している母親の CH 値とは関連性を認めなかったが、今後は妊娠の影響のない時点での血清脂質と臍帯血中の脂質との関連、および臍帯血中脂質濃の経時的変化を検討することが重要な課題と思う。

小児期における高脂血症の検索

大阪大学小児科 藪 内 百 治
飯 田 喜 彦
原 田 徳 蔵

1. 大阪地区学童の血清コレステロールの検索

都会地における4校の小学校を用い、1年生から6年生まで男511人、女424人について、朝食後2—4時間に採血し、採血標品の一部は Lieberman-Burchard 法で、残りは酵素法(デタミナーC)でコレステロールを測定した。

Lieberman-Burchard 法で測定したA, B校では1年から6年生まで男女とも 160 mg/dl 前後の値を示し、 200 mg/dl 以上の高コレステロール値を示した患者は551人中44人(8%)であった。しかし酵素法を用いて測定したC, D校では $180 \sim 200$ mg/dl の値を示し、C校では146人中56人(38%)が、D校では238人中88人(37%)が 200 mg/dl 以上の値を示した。これらC, D校における高値は地域的な差によるよりもむしろ、測定法の差によるものと思われ、同一サンプルで測定した成績ではコレステロール量が多くなるにしたがって、酵素法の方がより高くでる傾向が認められた。これらが食事に関連するの否か、今後追求する予定である。

2. コレステロール測定によって見いだされた高コレステロール血症児の検索

昭和50年, 51年度に阪大小児科で採血測定した外来患

者294人のうち 200 mg/dl 以上のコレステロール値を示した患者27人(9.1%)に再検をよびかけ、15名について血清コレステロール値を検索し得た。15名の前回の測定値は 216 ± 14.2 mg/dl で呼び出した時の値は 200 ± 30.2 mg/dl と大きな差はみられなかった。しかし8名は 200 mg/dl 以下を示し、多くのものは低下していたが、一部には高くなったものもあり、 230 mg/dl 以上を示したものは3名であった。3名については経時的に測定を行った。食事指導によりコレステロール値の低下は1例で他の2例は徐々に高値の傾向をとり、今後の観察が必要と思われた。無差別抽出者294人のうち少なくとも3人、1%に持続性の高コレステロールを示すものがあることは注意が必要であることを示している。

3. 家族性高カイロミクロン血症の1例

生後2カ月の女児。出生後新生児黄疸のためビリルビン測定を行ったところ、血漿白濁のため検査不能であった。2カ月時に肝脾腫を指摘され肝機能検査をうけたが、測定不能のため当科へ紹介された。

両親はいとこ結婚で、家族、親族には異常を認めない。身体所見で肝4cm, 脾3cmを触知した。顔色は白く、眼底に lipemia retinalis を認めた。前額部には黄色腫

家族性高カイロミクロン血症患者の検査成績
血清脂質

	調整粉乳 摂取中	無脂肪粉* 乳摂取中
コレステロール (mg/dl)	630	263
中性脂肪 (mg/dl)	8,000	273
磷脂質 (mg/dl)	213	194
遊離脂酸 (μ Eq/L)	326	490

*試作乳 810 (明治)

がわずかに認められた。

検査所見では血清を24時間保存することによりクリーム層と透明層に分離した。患児の血清脂質は高値を示し、とくに中性脂肪は著しい高値を示し、コレステロールも高値であった。Disc 電気泳動によるリポ蛋白の分析ではカイロミクロンが主で、 α , β リポ蛋白は痕跡であった。患児の血漿リポ蛋白リパーゼ活性は10分値で

血漿リポ蛋白リパーゼ活性
 μ mole FFA/ml/mim.

久城らの方法

ヘパリン 0.1 mg/kg 静注

イントラリビドのエマルジョンを基質とする

	患者	対照	正常値(久城ら)
0分値	0	0	0
10分値	0.025	0.145	0.196 \pm 0.030
20分値	0.030	0.113	0.149 \pm 0.030
30分値	0.030	0.106	0.101 \pm 0.017

正常対照の1/7を示し著しい低値であった。

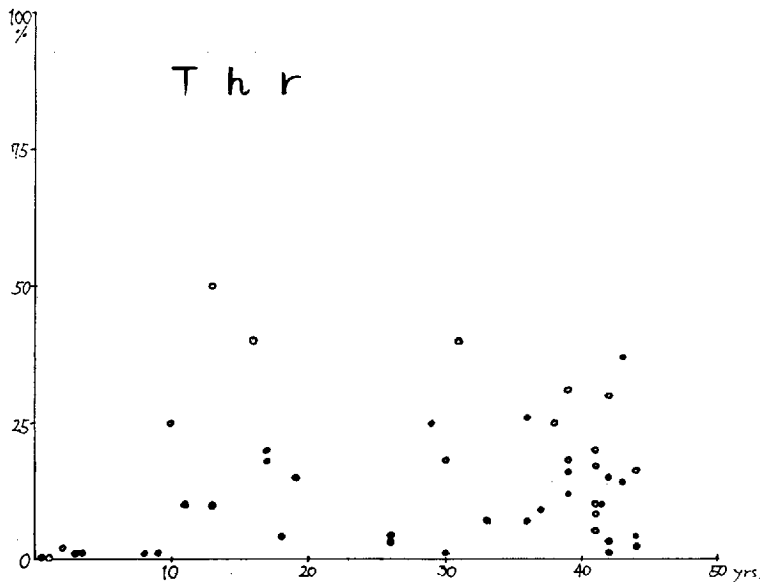
患児に脱脂乳を与えた結果血清脂質、電気泳動像ともに正常化した。両親、親族のリポ蛋白リパーゼ活性さらに患児、ヘテロのその他のエステラーゼ活性については今後検索の予定である。

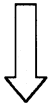
小児若年者の大動脈および冠状動脈硬化度の年令的推移 ならびに硬化度に関する国際比較

慶応大学病理 細 田 泰 弘
石 井 寿 晴

私共は、1977年来、幼・小年期、青年期、若年期(0~44才)の日本人若年層の大動脈、冠状動脈硬化度の年

令的推移、並びに硬化度に関する国際比較研究を続行し、現在120例を蒐集している。最終蒐集目標数は200例であ





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 大阪地区学童の血清コレステロールの検索

都会地における4校の小学校を用い、1年生から6年生まで男511人、女424人について、朝食後2-4時間に採血し、採血標品の一部はLieberman-Burchard法で、残りは酵素法(デタミナーC)でコレステロールを測定した。